

マーケット指標一覧表 (ウィークリーデータ)

年月	内外金利			為替相場		内外株式		物価指数 CRB指数	
	新発国債 10年	米国債 10年	独連邦債 10年	ドル円	ユーロ円	日経平均 株価	米国株 NYダウ30		
2009.01	9	1.290	2.39	3.01	91.15	124.62	8836.80	8599.18	229.91
	16	1.220	2.34	2.92	90.29	119.54	8230.15	8281.22	221.09
	23	1.230	2.62	3.24	88.32	113.60	7745.25	8077.56	225.79
	30	1.270	2.85	3.29	89.49	115.40	7994.05	8000.86	220.37
2009.02	6	1.335	2.98	3.37	90.92	116.07	8076.62	8280.59	224.36
	13	1.260	2.90	3.13	91.17	117.91	7779.40	7850.41	213.14
	20	1.270	2.79	3.01	94.08	118.49	7416.38	7365.67	202.47
	27	1.270	3.01	3.12	97.85	124.31	7568.42	7062.93	211.57
2009.03	6	1.290	2.87	2.93	97.35	123.58	7173.10	6626.94	209.59
	13	1.315	2.89	3.08	97.98	126.53	7569.28	7223.98	211.08
	20	—	2.63	2.97	—	—	—	7278.38	226.08
	27	1.330	2.76	3.13	97.88	132.79	8626.97	7776.18	222.26
2009.04	3	1.420	2.88	3.24	99.78	134.01	8749.84	8017.59	228.93
	10	1.450	—	—	100.45	131.89	8964.11	—	227.88
	17	1.445	2.94	3.27	99.39	130.09	8907.58	8131.33	225.85
	24	1.420	2.99	3.18	97.06	128.05	8707.99	8076.29	222.86
2009.05	1	1.395	3.15	—	99.26	131.86	8977.37	8212.41	229.04
	8	1.450	3.28	3.46	99.38	133.13	9432.83	8574.65	243.23
	15	1.425	3.13	3.36	95.27	129.65	9265.02	8268.64	236.24
	22	1.430	3.45	3.57	94.24	131.30	9225.81	8277.32	244.10
	29	1.480	3.46	3.58	96.60	135.02	9522.50	8500.33	253.05
2009.06	5	1.495	3.83	3.72	96.71	137.21	9768.01	8763.13	257.92

実際に過去10年間、一般の消費財はほとんど値上がりしてない。そして過去10年、わが国はほぼ一貫して低金利時代であった。データをみてみよう。この間、前週比でC R B指数が上がっているのは11回。このうち同時に米国の

債の利回りも上がっているのが10回ある。
③金利上昇→通貨高
金利が上がれば、高くなった金利を求めて他国からその通貨の買いが増えて高くなるというメカニズムが働く。「水は低きに流れ、マネーは高金利に流れる」。
さて、まず米国のデータを見よう。やはり前週比で10年国債利回りが上がっているのが14回ある。このうち同時期にドルの対円相場が上昇しているのが9回ある。ユーロのデータはどうか。ユーロを代表するドイツ国債を見ると上昇が12回。うち10回でユーロの対円相場は上昇してい

る。確率はいずれも60%以上だ。
④米国金利→日本金利
現在のようにマーケットがグローバル化している中では、少なくとも先進諸国の金利は互いに同じ方向で動くのが基本だ。米国金利の上昇は14回。日本の10年国債も同じように上がっているのが10回ある。
⑤米国株式→日本株式
これも相当程度運動することが知られている。同じくNY株の上昇が11回。うち日本株も上がったところが8回。
今回は初級用の説明につき、これらのマーケットの動きのうち1対1の関係だけを取り上げたが、実際にはAに対して影響を及ぼす要素はBだけではなく、C、Dと複数あることが珍しくない。これについては時期を選んで説明することにしよう。
書く習慣を身につければマーケット読解力は上がる
これからマーケットを学ぼうとする初心者には、以上の方法をぜひお勧めしたい。中には「このコ

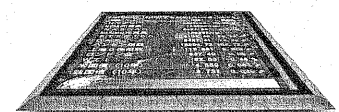
ンピュータ全盛時代にいまさら、いちいち数字を書き入れてさらに「カードで印をつけていくなんてグサイ」と反応される方もあると思う。しかし、私は違うと思う。いまは、その気になってサイトを探し歩けば、ある程度のマーケットデータの一覧表は手に入れることができる。しかもコピーができるサイトも珍しくない。
しかし、皆さんには新聞のマーケット欄などを参照しながら、具体的に手を動かして野線用紙のマスを埋めていくという作業を体験してほしい。そして今回紹介したように、前週比(あるいはこれは前日比や前月比であってもいい)での上げ下げ(の方向性)を測りながら、メーカーで印を記していくというローテクな作業がある時期までは続けてほしいと思う。少なくとも日本経済新聞のマーケット欄をそれほど抵抗なく読めるようになるまでは続けてほしい。このために要する時間は、1日24時間(11440分)のうちわずか3分~5分程度でいいのだから。

今回はマーケットの諸現象がいかに関連しあっているかを手取り早く知るためのコツをお教えしよう。用意するのは罫線用紙と鉛筆とメーカーだけだ。「マーケットデータを定点観測して、それを表の形で整理しておく」ことの有用性は折に触れて紹介してきた。しかし、この表を作成するだけでは各マーケットの関係性は見えてこない。そこで、この表にちよつとした工夫を凝らしてみる。すると、マーケットの動きがとても身近な、かつ興味深いものになるのだ。
図表はマーケットデータをウィークリーベースで並べたものである。この図表で、前週末に比べて当該週末の数値が上昇している場合のみ、そのセルにメーカーで色付けしてみよう。これで何が見えてくるのか。実はこの工夫だけで、異なるマーケット間の関係が浮き彫りにされるのだ。
本欄の愛読者の方はずでにご承知であろうが、マーケットデータを見る場合の2大原則は「流れとしてみる」と「互いの関係を

読み取ること」である。このうちの後者を可能にするのが、今回紹介している「前週比でプラスのところだけを色付けする」なのだ。
株価・金利、為替、C R B指数の関係を見る
以下、いくつかのデータの関係性について図表をもとに検討してみることしよう。
①株価→長期金利
まず、株価と長期金利の動きから。日経平均株価がこの間、前週比で上昇したのは11回。このうち、10年長期国債利回りも同じように上昇しているのが9回。米国の場合も同じく、NYダウ平均株価が上昇したのが11回ある。このうち10年米利回りの利回りが上昇しているところが10回ある。
もちろんこれは「株価が上がると株式市場にお金移動する」「債券市場からお金が流出する」「債券が売られているはず」「債券価格が下がり、債券利回りは上がっているはず」という理屈を証明してくれている。
②ロイター・ジェフリーズC R B

指数→米国債10年
国際的なレベルでもっともインフレ動向を先見的に示すことで知られるC R B指数が上がれば、インフレ期待(あるいは懸念)から長期金利は上がるはずというのが基本だ。もちろんこれは「インフレ」→「値が上がるうちに買っておこう」→「活発な消費を可能にするだけのお金が必要」→「お金の借入れが活発化する」→「金利が上がる」というメカニズムが働くからだ。

角川総一の



マーケット・リテラシー

金融市場を読む、解く、話す力を養う

File.047

金融・経済の連関を実感するための工夫とは?
**前週末に比べて数値が上がった指標から
マーケットの関係性が見えてくる**